



SHOUTOU-GAKUSYU

公益財団法人 松濤学舎
佐賀育英会

令和8年度 舎監通信

令和8年4月15日発行

松濤学舎HP



For your SHOTO Vol.2

文責 舎監 下村昌弘

「ガクチカ」考 —ガクチカは求めるものにあらず—

4月も半ばとなりました。早くもと言うべきか、まだ、と言うべきか…。

4月は環境が大きく変わり一日一日が濃いと感ずます。毎日毎日、いろいろあってそこそこ疲れを感じるがゆえに「まだ半月しか経ってないのか」というのが正直な感覚ではないでしょうか。おそらく1年生の皆さんは特にそうだと思います。

他方、2・3年生には余裕を感じます。いい意味で先輩の雰囲気をもとつつある者もいれば、いよいよ自分の好き勝手にし始めたなあと感じる輩も。いずれの場合も他人が判断することであり自分ではなかなか気がつきにくいことなので、謙虚に精進してほしいと思っています。

4年生はたいへんでしょう。就職活動と本分である学業とのバランスがとりにくく葛藤の日々かもしれません。周りに流されて自分を見失わないよう、自分のことばを大切にしてください。

さて、もはや大学生にとっては日常語となった“ガクチカ”。

この言葉が使われ始めたのは2010年ごろと言われています。かつて採用する側はその指標を“学歴”に頼っていました。学歴で、ある程度その人の問題解決力が測れていたわけです。まだ変化の少ない時代でした。

しかし、新型コロナに代表されるような、未知の課題、正解のない問いに対する能力が昨今では必要になり、受験で試される力と社会で求められる力にいつそう乖離が生じてしまいました。

そこで、企業は“ガクチカ”に注目しました。ガクチカはその人がある場面でどう考え、どう判断し、どう行動したかを診るためにはうってつけなのです。なぜならガクチカは試行錯誤の経験であり、そこに仕事への対応力が顕著に反映されやすいからです。



私も何度か採用面接に関わったことがありますが、いずれの場合もパフォーマンス評価を重視していました。実際の課題状況でどう取り組んだか、どんなパフォーマンスを発揮したかを問うわけです。パフォーマンス評価は単なる受け答えではなく、行動・思考プロセス・成果物・言動を通じて能力を測ります。ガクチカを問うことはパフォーマンス評価をすることに他なりません。

あなたは学生時代どんなことに問題意識をもって、どう向き合ったのか。そこで失敗はなかったか、あったとしたらその時、誰とどんなふうにして解決したか、…。そういう試行錯誤のまるごとを訊きたいのです。決して成功体験だけではなく、失敗を含めた経験そのものを訊きたいのです。

結論は、ガクチカはどこかにあって求めるものではなく、試行錯誤の経験そのものがガクチカになる、つまり自分の生き方そのものが問われるということです。そういう意味では寮内での振る舞いも生き方の基盤に直結するものですので、日常生活の精度を高めることが必要だと思います。

“ヒヤリハット”と“ハインリッヒ” —強い現場になるために—

4月7日、川崎市のJFEスチール東日本製鉄所の京浜地区敷地内で、クレーンの解体作業中に足場が崩れ、男性作業員5人が転落した事故がありました。落命した作業員の中には皆さんと同じくらいの人もいて胸が締めつけられます。原因はこれから究明されていくでしょうが、私たちも第3者ながらここから考えるべきことは多いと思います。

ヒヤリハットという言葉を知っていますか？ ヒヤリハットとは「ヒヤリ」としたり「ハッ」としたりするような危険な事象です。



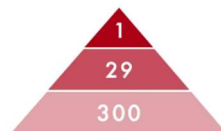
読売新聞 4月8日オンライン

ヒヤリハットは、重大事故の予兆となることが多く、放置すると大きな事故につながる可能性があります。例えば、作業中に転倒しそうになったり、誤って間違った商品を配送しそうになったり。

関連してハインリッヒの法則というものがあります。1件の重大事故の背後には29件の軽微な事故があり、さらにその背後には300件のヒヤリハットが存在するとされています。

つまり、ヒヤリハットを無視すると、重大な事故が発生するリスクが高まるわけです。

「1:29:300の法則」とも呼ばれる



……重大災害
……軽傷を伴う災害
……ヒヤリ・ハット

先日名村造船の社内報で「安全とは“人間のクセとの戦い”である」という記事を読んでなるほどなあと思いました。

「災害が起きた時人は大体同じことを言う。「まさか自分が」「これくらい大丈夫かなと思って」。しかし油断して近道をした瞬間にそこに潜んでいた不安全状態が牙をむきます」 製造本部長 松永邦輔氏

そこであらためて提唱されていたのが5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)。これは危険な現場だけの話ではないと感じます。

- 整理…いらぬものは捨てる見極めをもつ
- 整頓…必要なものだけに絞る
- 清掃…掃除をすると“異常”が勝手に見え出す
- 清潔…キレイを保つと世界が変わって見える
- しつけ…できない理由より続ける工夫

寮生活でも意識しておいてほしい言葉だなと感じます。人間は弱い。だからこそ仲間と声を掛け合い、ルールを守り、守らせる。時にツッコミ合いながら日常の精度を高める。これこそが本当の強い現場なのだと思います。

Notice! ---人は元来、受身形で生まれる (I was born.) けど、生み出された以上、主体的に受け止め直して生きていくものです。多くのものごとはそういうものなのかもしれません。初めは押し付けられたものでも、やがてそれを他人事ではなくジブンゴトとして受け止めていく。例えば幼き日のお稽古事…。日曜日の英会話教室しかり。これはクラブ活動(自治活動)に位置づけられています。今年、試験的に探究教室も開催します。皆さんの前向きな参加を期待しています!

月	日	曜	行事等
4	15	水	定期監査(佐賀育英会監事来舎)
4	18	金	はがくれフォーラム(オンライン、希望者は事務室まで)
4	19	日	浴恩館つつじ祭(主催の中嶋さんは佐賀の人です)
4	20	月	常務役員会(佐賀育英会理事長等来舎)
4	26	日	名村造船企業説明・バーベキュー大会



かさばるプラゴミははさみで切るなど工夫してゴミ袋に収めましょう。ごみを量を少なくするときっと気持ちよくなります!

【武蔵野の風】大学生と日常的に接して自分の学生時代をよく思い出すようになった。昔のことを思い出すのは年を取った証拠なのかもしれない。▼学生時代のスタートは家賃一万五千円の四畳半だった。それでも半畳のキッチンがついて他の友達よりリッチな環境だった。共同トイレは屋外にあった。風呂は近くの銭湯で180円だったと思う。髪を洗うなら50円増し。払わずに洗うと後で番台から「兄ちゃん髪洗うたやろ」とひどく叱られた。やくざの街だったので入れ墨をした人が横に座ることもあり、しびきを掛けないように細心の注意を払った。マナーを学んだ。▼電話もエアコンもなかった。実家からは電報が来た。「電話せよ父」。こう言うと恐ろしく昔の話のように聞こえるかもしれないが、バブル期で日本に元気があった時代。▼朝日Journalをカバンにつっこみ、筑紫哲也や浅田彰を追った。村上春樹や村上龍を演習で発表した。したいようにする。大学生になって人と比べることをあまりしなくなったような気がする。かわいものがない貴重な時期だった。▼この秋数十年ぶりに体育会弓道部の同窓会がある。参加してみようと思う。(弓口)